

イタリア語事始め、 そして、その後……

倉 田 清

大学の3年目だった。イタリア語を勉強しようと、イタリア学科の授業にもぐり込んだ。教官はイタリア女性。大きな目玉をむいて、つかつかと一番後ろの席にいる僕のところへやって来て、僕を指差して、突然、大声をあげた。「ドンナオンナ、ドンナオンナ!」。きょとんとしている僕に、さらに、「ドンナオンナ! ドンナオンナ! ドンナオンナ!」である。そして、今度はフランス語で「あなたはフランス科の学生でしょう」と尋ねられた。「ウイ、マダム」と返事をする、さらに今度は、流暢な日本語で、「ドンナというのは、女ということです」と説明。「なあーんだ」と思ったが、冷汗をかいた。そして、二ヶ月発音を中心にストラミジヨリ先生からイタリア語会話を習った。その年の夏休み、イタリア語の文法と短文の読解を夢中になって勉強した。幸い、フランス語の知識も借りてやさしい詩や随筆などが読めるようになった。ラテン語を少しかじっていることも役立って、次第にイタリア語の魅力にとりつかれていったことは勿論である。

その後、フィレンツェ、ヴェネツィア、ローマなどの美術館をしばし訪れた。積極的にイタリア人とおしゃべりをし、たどたどしい表現で議論もした。その度に、会話は上達していった……ローマ伝統の美に魅惑され、圧倒されていく自分を嬉しく思うのだった。

ある年、シチリアのパレルモ大学でフランス文学専攻の学生たちにフランス語で現代フランス文学のベギーやモーリヤックの話をした。快活な、そして、研究心旺盛な若者たちだった。質問がた

くさん出され、私を満足させてくれた。ところでパレルモ大学の語学教育はイタリアでは定評がある。初習外国語の教室は15人単位の小さなもので、小さな教壇に小さな黒板が印象的。そのミニ教室がずらりと並んでいる。履修者15人以内で徹底した語学教育が施されているようだ。同じラテン系のフランス語やスペイン語は簡単に履修してしまうとのことである。

文学部長ブッピッタ教授は著名なアナル学派の文化人類学者。彼の研究室は美術館さながらで、発掘されたさまざまな紀元前の壺やルネサンスや17世紀だという肖像画や武器までがところ狭しと置いてある。髭面の先生と歴史や文学について話し合っているうちに、話題は“死”について、日本の武士の死生観や特攻隊のパイロットたちの心情に及んだ。「武士たちは日常坐臥自らの死と親和していったのだ。ことに特攻のパイロットたちは一週間、二週間という短い時間に確実な死を前にして、自分の生と死の意義を考えながら死を生きていたのだ」と言うと、ブッピッタ先生は大いに興味を示された。ヘミングウェイや三島由紀夫の“激烈な死”についても話がはずんだ……

イタリア語の方は、最近必要があって、ダンテの『神曲』(La Divina Commedia)の「地獄篇」(Inferno)を少しづつ読んでいる。ダンテの芸術的手法が果たして「考案する」(inventer)のか夏目漱石やベギーのように「発見する」(découvrir)のかを確かめるため、また、彼が人間の罪をどのように扱っているのかを知るためであるが、とにかく難しいかぎりである……